



TITLE:

[書評] 章士釗 「柳文指要」

AUTHOR(S):

笈, 文生

CITATION:

笈, 文生. [書評] 章士釗 「柳文指要」. 中國文學報 1974, 24: 111-117

ISSUE DATE:

1974-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177293>

RIGHT:

にかえたり、意味を不明にしたり、そして譯者自身が告白するように原文にあるものをときどき落したりしているの
で、私はなおさらこの詩形の使用に感心しない。

クーパー氏はだいたいの場合に前から出た正確な英譯を
參考にしているので、誤譯はそれほど見當らないが、彼自
身の漢文を讀める力はずぎの一例で察することが出来るで
あらう。杜甫の「竹根稚子無人見」と云う句は、クーパー
氏の譯にこうなっている、「だれも見っていないうちに稚子
はたけのこを根から掘っている」！ウェイリーの亡靈はい
まごろ泣いているであらう。(一九七四年七月六日)

(コロンビア大學 パートン・ワトソン)

章士釗 「柳文指要」

北京 中華書局 一九七一年九月 二二四四頁

章氏の大著が出版されて、はやくもまる三年が経過した。
郭沫若氏の「李白と杜甫」とともに、文革後はじめての本

書 評

格的な學術書の出現として、斯界の耳目を集めたことは、
まだ記憶に新しい。しかし「李白と杜甫」がいち早く翻譯
され、書評も何度か書かれているのに較べると、「柳文
指要」の方は、文言で書かれた極めて地味な内容のもので
あるうえに、二千頁を超える大作であるためか、あるいは
また、文革後にこのような書物が世に出されたことの意味
を量りかねてか、わが國では高田淳氏の力作「章士釗につ
いて」(思想一九七三年七月號 岩波書店)を例外として、ほ
んど沈黙が保たれたままになっている。實際のところ筆
者にも「文化革命の主將」としてこの上ない高い評價を與
えられた魯迅を軍閥段祺瑞政府の司法總長兼教育總長とし
てかつて彈壓したことのある「反動派の頭目」の書物が、
文革後にまつさきに出版されたことの意味——もちろん書
物の内容にかかわつてのことであるが——は、いまだによ
くはわからない。

中華書局の出版説明にはいう。

「作者(章氏)は辯證法的唯物論および史的唯物論の觀點
をつかつて歴史を研究し、柳文を解釋することが十分には

できておらず、社會發展の記述においても循環論の誤つた見方があつて、柳宗元という歴史上の人物に對して嚴密な階級分析を缺き、その歴史上における進歩性を誇張しすぎている。しかし柳宗元研究の專著としてみるなら、そこには新しい見方や取るべき處も多く、われわれがわが國古代のすぐれた文化遺産を批判的に吸收するにあたつて、一定の參考に價するものとなるであらう」。(一九七二年四月)

後にも觸れるごとく、本書は文革直前に出版が準備されていたものであつて、決して文革の試練の成果として書かれたものではない。その點では郭氏の著書ほどにはその意味を考えるには及ばないのかもしれない。まして章氏は湖南省長沙の出身、巷間の説によれば毛澤東の老師であつたという。そして一九七一年は、華やかなピンポン外交にはじまつて、ニクソン訪中が發表され、中國の國連加盟が決定するなど、緊張緩和の年であつた。

さて「柳文指要」三函十四冊は大きく上下の二部に分かれる。上の「體要之部」は、「柳河東集」の排列に従つて、卷一の雅詩歌曲から卷四十一の祭文まで、篇ごとに評論、

考證、校箋などを含む永年の研究成果を示したものであり、下の「通要之部」は、柳宗元にかかわる政治、文學、儒佛、韓柳關係などさまざまなテーマに關する著者自身の見解を先人の研究や評論をふまえながら披瀝したものである。柳宗元の詩については、陶淵明や韋應物の詩のように政治性の缺落した「幽閒雅淡の作」で、散文とは同列に論じることができないという偏見を、著者がかつてもつていたこともあつて卷四十二・四十三に續けて收められるはずの詩の部分が、體要之部には省かれている。章氏の考えはその後改められたが、出版に際し體要之部に、同じ體裁でその詩すべてにわたつて書くだけの餘裕がなかつたため、やむを得ず敘志・感遇などの諸篇を選んで、通要之部に入れられた(「通要之部序」)。書名に使われた「指要」の語は、「總序」によれば、妄言亂世の書である「鬼谷子」に、元冀という古書好きが數千言に及ぶ指要を書いたことを述べる柳宗元の「辯鬼谷子」にもとづく。柳宗元は元冀の「指要」について「嗚呼、其の術を好むを爲すことや過^{あやま}てり」と斷じた。章氏自身も、その説を支持しつつ、鬼谷子の説く消極的な

抵抗の姿勢では、身を亡ぼす結果を招くだけだとして、鬼谷子を受した初唐の陳子昂が結局は獄死したことに觸れる（上・巻四）。にもかかわらず章氏が敢えて指要の語を書名に選んだことになにか特別の意味があるのか、それとも指要が「世説」などにも使われているように、單なる「文家の常語」であるからにすぎないのか、いやそんなことをあれこれ考えること自體が小人の要らざる穿鑿なのかもしれぬ。

それはともかくとして、本書の「總序」が書かれたのが、一九六四年二月、章氏八十四歳の時、「通要之部序」が六五年四月、八十五歳、「續序」が七一年八月、九十一歳、跋が六六年三月、八十六歳、再跋が七一年三月である。「總序」が書かれてから七一年九月の出版に至るまで七年の歳月を要したのは、もちろん六六年の春から本格化した文化大革命のためである。そして章氏は「柳文指要」が公刊された翌々年、七三年七月一日、訪問先の香港で客死した。時に九十三歳。全國人民代表大會常務委員、北京中央文史研究館館長が最後の肩書きであつたはずである。

書 評

章士釗にとつて、柳宗元の散文は少年の頃からの愛讀書であつた。氏自身の回想によれば、はじめて「柳文」を知つたのは、湖南永州刻本を手に入れた十三歳の時であつたという（下・巻五「翁叔平之於柳文」）。以後、海外留學の折も、仕官した時も、解放後も、前後六七十年にわたつて、「柳河東集」は常にその座右にあつた。「柳文指要」は、いわば氏の一生をかけた柳宗元研究の總決算の書なのである。

「桐城の謬種」（錢玄同の胡適宛の書簡に見える語。「新青年」Ⅲ—6）といわれた章氏は、柳宗元を貶しめる桐城派の人びとに抗して嚴復が著した「關韓論」に左袒し、熱烈な柳宗元の信奉者となつた。氏にいわせれば、韓愈の千年にわたる優位は、嚴復の一撃によつて揺らぎはじめ、「毎況愈下」すなわち時代がくだるとともに落ちめになり、一九四九年、人民政權が成立するとともに、「柳進み韓退く」大勢はもはや決定的となつた。にもかかわらず、解放後陸續と發表される論文を見ると、いまだに韓愈を辯護するものが少なからずあるのは一體どうしたことか（下・巻六「關韓餘論」）。かくして「柳文指要」の最大テーマは「關韓崇柳」

にしぼられた。體要之部と通要之部とを問わず、韓を關しりぞけ柳を崇たつぶ論調は至るところで執拗なまでにくり返される。

柳宗元を「韓門の罪人」ときめつけた歐陽修は勿論のこと、近人では、陳寅恪(上・卷四「晉文公問守原議」、同卷二十五「送文暢上人登五臺山遂遊河朔序」など)や范文瀾(下・卷十一「從左道旁門看韓退之」、柳宗元研究の專門家吳文治(上・卷三〇「致楊京兆憑書」など、少しでも韓愈に甘く柳宗元に不利な記述をしたものには、見逃すことなく反駁が加えられる。章氏の韓愈に對する感情的な反撥と柳宗元に對する判官びいきが、いかに激しいものであるかは、たとえば「讀先君石表陰先友記」の韓愈について述べたくだりを讀んだだけでも、十分にわかつてもらえるであろう。

「韓愈は永貞の政變の後、大いに「二王劉柳」を攻撃した。ところが柳宗元の方は韓愈を尊んで「先友」とし、「文は益ます奇なり」とほめたたえている。韓柳人品の高下は、この點からも判然とわかるのである」(下・卷三)

章氏の韓愈に對する批判は、韓愈が散文改革にあたつて述べた有名なスローガン「文從字順」「陳言務去」につい

ても容赦なく及ぶ。氏はいう。韓愈はみずから「文從い字順う」ことを主張しながら、一方で盧仝が奇怪な文をつづるのを獎勵しているし、「薦士詩」では孟郊をほめて「空に横たわつて硬語を盤わだかまらしむるも、妥帖して力は昇あがを排す」という。また韓愈を手本とした孫可之の文章は、往々にして字は理解できず、文は句讀がうてない。唐代において眞に「文從字順」の域に到達し得たのは、韓に非ずして柳である(下・卷七「樵説」と。さらに「陳言を務めて去る」

という主張も、從來文人はあまり深くは考えずにただ韓愈の文が八代の衰を起し得た眞諦はこの一語にこそあつたとしてゐるが、陳言とは何か、彼ははたしてそれを去ることができたのかということについては、まったく問題にもしていないし、そもそも韓愈門下の李翱自身がこの主張に疑問を抱き、われわれが古文を書く勉強をするのは古人の道を愛するがため、古人の道を受するのなら、古人の言葉を受はざるを得ないではないかといっている。また宋祁が「新唐書」を撰した時に「舊唐書」の陳語を妄りに改竄して、わけのわからぬ文章にしてしまつたのは、韓愈の教え

を承けついで、それを一層發展させたためである（下・卷九「陳言務去」と、氏はきめつけるのである。

筆者などは正直なところ、こうした熱烈な關韓崇柳論がしばしば公平を缺く結論をもたらすのではないかという危惧を抱きつつも、その一方で、研究者としてかくほだまで心酔し、打ち込むことのできる對象を持ち得た章氏の幸福を思わずにはいられないのである。

ところでいま中國では、昨年にはじまる「批林批孔」運動の全國的なとりくみのなかで「儒法鬭爭史」研究のキャンペーンが大々的に展開されている。そのなかで、柳宗元の「封建論」があらためて脚光を浴びはじめた。周一良氏の「讀柳宗元『封建論』」（原載一九七三年十一月九日「北京日報」・その後「紅旗」七四年第二期に收録）につづく鍾成譯注の「封建論」（『活頁文選』1 七四年一月 北京中華書局）、さらに北京汽車製造廠工人理論組による譯注解說「讀封建論」（七四年六月二十九日～七月一日「光明日報」）がそれである。ついでにいえば「封建論」の譯注は、文革以前にも顧易生によつて書かれている。「中華活葉文選」16合訂本（一九六二年五月

上海中華書局）しかしこれら最近の論著が、章氏の「柳文指要」に直接つながるものではもちろんない。その證據に、これらの論著が文革後に出版された大著「柳文指要」に言及することは一度もない。それは章氏が、例えば北京汽車製造廠工人理論組の書いた「讀『封建論』」の前言にいうごとく「反潮流の精神で儒家の孔孟の道に對して大膽な挑戰をおこない、革新進取を主張し、歴史の潮流に順應した秦の始皇らの法家を高く評價し……」というようなわりきつた觀點で「封建論」をあつかっているわけでは必ずしもないからである。

體要之部卷三の「封建論」は全部で十四節四十二頁にも及ぶスペースがあてられている。章氏はまず第一節で何焯の「義門讀書記」を引き、柳宗元の學識が班固に遠く及ばないという何焯を世間知らずの腐儒一孔之論だとして一蹴し、わざわざ班固の「諸侯王表」の全文を引用して反論する。第二節では、柳宗元の「封建論」が空前の大文章であり、彼自らの政治理論とその實施方法を述べたものと評價しつつ、永貞の改革に失敗した原因を考察し、蘇軾の「時

は聖人の能く爲す所に非る也」を引いて、柳宗元が「爲す能わざるの時に爲した」がために敗れたとする。以下三節では蘇軾と楊慎、四節は劉昫の「舊唐書・德宗順宗諸子列傳論」、五節は范祖禹の「唐鑑」、六節は魏源の「古微堂內集」の「治篇」、七節は葉適の「治勢篇」、八節は趙秉文の「侯守論」、九節は吳萊の「胡氏管見唐柳宗元封建論後題」、十節は顧炎武の「郡縣論」、十一節は袁枚の「再書封建論後」、十二節は清末の張亨嘉の「擬柳子厚封建論」、十三節は焦循の「易餘籀錄」、十四節は龍翰臣の「續封建論」などの全文または部分を引用しつつ論評を加える。さらに「通要之部」卷三にも魏禧の「封建論」、王文治の「陸柳封建論」が引用される。

章氏の本書における敘述形式の特徴のひとつは、このように、過去の關係資料を實に丹念に引用することにある。讀者にとつて、煩雜さを免がれない缺點をもつ反面、柳宗元の一つ一つの文章に關する先人の言及をまとめて知ることのできる利點は有難い。それは例えば周一良氏の論文が「舊制度を懸命に護ろうとした蘇軾は柳宗元を『小人の忌

憚なき者』と公然とののしつた」と、かたずけてしまつてゐるのにくらべれば、はるかに親切といふべきであろう。また章氏の引く資料には、しばしば珍しいものがあることも注目に値する。かつて吳文治氏の編した「古典文學研究資料彙編・柳宗元卷」二冊（一九六四年十月 北京中華書局）に含まれない資料は枚舉にいとまがないほどである。清朝諸家の文章、とりわけ清末のものをもつともひんばんに利用されている。「封建論」に關する引用資料の場合は必ずしも適當な例にはならないが、それでも張亨嘉や龍翰臣のものなど、一般の研究者のあまり注意しない資料といつてよいだろう。

「柳文指要」について語るべきことはあまりにも多い。下編卷四・五の「評林」、卷六の「第韓」など、そのままで一種の中國散文評論史になつてゐることや、韓柳の佛教へのかかわりを論じた上編卷二十五や下編卷十一について、また柳文個々の訓詁・解釋の問題など、章氏のすぐれた業績および問題提起については今はすべて割愛せざるを得ない。はじめに觸れた高田淳氏の論文「章士釗について」に

は、数々の興味ある指摘があるので参照していただきたい。また章氏の訓詁・考證に關する一部の意見は、拙著「韓愈・柳宗元」（一九七三年八月 筑摩書房）や「柳宗元」童區寄傳「考」（「立命館文學」一九七三年八・九月號）で觸れたことがある。

晩清から民國の初めにかけて、一本の筆をひつさげて活躍した嚴復・梁啓超の二公にやや後れて起つた章士釗氏は、桐城の變種、あるいは桐城の餘孽とかげ口をたたかれたことがある。氏にいわせれば「桐城とは絶えて近からず」（跋）であつたらしいが、いずれにせよ、章氏は傳統的な文言による散文、古文の大家であつて、哲學者または歴史家では必ずしもない。そこから氏の歴史や哲學に關する敘述にある甘さがみられることは、讀者の一般に氣づかれるところであろう。ともあれ、二千年來の傳統文學の體裁にのつとつて書かれたものとしては章氏の「柳文指要」は恐らく「最終の結穴」となるに違いない。その一世紀近くを生きた章氏の生涯をかけた研究の成果に對して、筆者などが書評の筆をとること自體、おこがましいかぎりであつた。

書 評

二千頁を超える巨冊をもてあまし、十分消化味讀できぬまま、このような拙文を草することの非を、章士釗氏と讀者におわびせねばならぬ。一九七四・九・五

（立命館大學 寛 文生）

〔補記〕

高田淳氏の「章士釗について」は、補訂のうえ、その『柳文指要』という副題を添えて、その後書かれた「章士釗の死」とともに、「章炳麟・章士釗・魯迅——辛亥の死と生と——」（一九七四年九月三〇日 龍溪書舎）に收められた。

また中國では、かつて中華書局から刊行された「柳河東集」（一九五八年十一月）が、句讀點の誤りや誤植を訂正した上に、付録數篇を加えて、上海人民出版社から最近再版され、さらに「天問天對註」が復旦大学中文系古典文学教研組によつて、同じく上海人民出版社から刊行されるなど、柳宗元に對する關心は、急速に高まりつつある。（一九七四・十・十五）